

大森 信
東京水産大学

コビレゴンドウと アカツメサンゴヤドカリ AMSL の二つの標本についてのノート

Short-finned pilot whale, *Globicephala macrorhynchus*, and a coral hermit crab,
Calcinus minutus: a note on the two specimens of the Akajima Marine Science Laboratory

M. Omori

1988年9月20日、阿嘉島のニシハマに体長4m足らずの小型の歯鯨が打ち上げられた。死後、かなりの間漂流していたものらしく、傷みがひどく尾部が欠損していたが、研究船船長の金城さんたちが翌日解体をし、浜の砂を掘って骨を埋めた。9ヵ月後、骨を洗って研究所に運んで、それから長い間受付の脇にそのまま並べてあった骨がこれである。飾りもの位にしか見られなかったのか、研究所を訪れる人もあまり興味がなかったようだし、それ以上に所員に積極的にこれを調べようとする人が出なかったのはちょっと残念だった。

ようやく昨年(1991)10月に気になっていた標本をVan der Spoel教授と二人で測定した。測定結果は次の通りである。

頭骨長 63cm	下顎歯列長 27cm
頭骨幅 47cm	吻 長 47cm
頭骨高 32cm	吻 幅 26cm
下顎長 54cm	歯 数 9~10個

(上顎下顎とも)

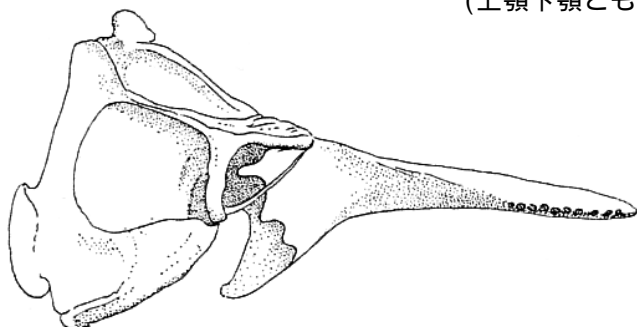


図: 阿嘉島に漂着した鯨の頭骨側面
(Van der Spoel教授による)。

国立科学博物館の宮崎信之博士は頭骨の写真からこれがコビレゴンドウ *Globicephala macrorhynchus* Gray, 1846 であろうと同定された。コビレゴンドウは世界中の熱帯から温帯にかけて生息する歯鯨で、日本沿岸では二つの地方型があることが知られているが、黒潮以南の沖縄を含む海域にみられるのはマゴンドウと呼ばれるものである(粕谷、1990)。いくつかのスケッチを持ってオランダに帰国した教授から、後で、これは若い *Globicephala melas* (traill, 1809) ヒレナガゴンドウであろうとの手紙があったが、ヒレナガゴンドウは北太平洋にはいないとされている。もっともヒレナガゴンドウとコビレゴンドウとの分布や形態の違いが明らかにされたのは1967年以降なので、Van der Spoel教授がこの鯨をヒレナガゴンドウと同定したのも無理はない。そのこととは別に、骨を調べている間に、右下顎骨の腫瘍のためにできた骨の瘤とひびを見つけ、これが鯨の死因だと判断されたのはさすがであった。若い頃、捕鯨船に乗って南極洋で活躍した人だけのことはある。

マゴンドウは沖縄では「ヒート狩」で捕獲される鯨である。「ヒート狩」は鯨の群れを見つけた数隻の船が、水面をたたいたり、石を投げたり、鉄パイプなどをたたいて水中に振動数の高い音を発して浅瀬に追い込む漁法で、名護湾では3~5月が主漁期となる(宮崎、1980)。

調査をした後、私達は骨を梱包しなおして研究所に大切に保管した。早い機会に補強財を使って骨格標本を完成し、展示したいと考えている。

オニヒトデとならんで巻貝の一種のシロレイシガイダマシやヒメシロレイシガイダマシによるサンゴの食害が報じられている。四国の宇和海や伊豆の三宅島での被害は相当深刻なようだ。同種の貝は阿嘉島のまわりにもいるが、幸いサンゴへの影響は目立っていない。

そんなことが話題になっていた昨年 11 月、保坂さんと一緒にアゴノハマのサンゴ礁で潜っていたら、水深 3m 位のところのショウガサンゴの枝の間にびっしりと殻長 3cm 位のシロレイシガイダマシがとりついているのを発見した。まわりのサンゴにはいないから、一つの群体だけが攻撃の対象になったようである。径およそ 20cm 位のサンゴの群体に 30~40 個位の貝が数えられた。

シロレイシガイダマシがポリプを食べる様子を観察しようとじっと見ていたら、そのうち貝が盛んにサンゴの枝の上で動きはじめた。マスクを近づけてよく見るとシロレイシガイダマシは貝殻だけで、中はヤドカリだったのである。サンゴの入り組んだ枝の間のヤドカリは採取しようとつくと（もちろん貝殻ごと）枝の間に落ちて取り出せなくなってしまう。明らかに防御とみられる行動である。翌日、大型ピンセットと水中ルーペとビデオカメラを持って潜った。シロレイシガイダマシを宿貝としたヤドカリの群れは別のショウガサンゴやヘラジカハナヤサイサンゴの太い枝状群体のすき間でも見つけた。同じ場所でこのほか、オオウラウズガイやメオニツノガイに入ったヤドカリもいた。水深 2~4m の潮通しのよいリーフの上部で今度は何個体も採取できたが、ヤドカリがポリプを食べる様子は確認できなかったし、食われたサンゴも見出せなかった。結局、数十個のヤドカリがなぜ特定のサンゴの上にだけ群れ集まっているのかはわからずじまいである。

ヤドカリの同定をお願いした千葉県立中央博物館の朝倉彰博士によると、持ち帰ってホルマリンで固定した標本は全てアカツメサンゴヤドカリ *Calcinus*

minutus Buitendijk 1937 だった。アカツメサンゴヤドカリはインドネシア東部、ニューギニア、ベトナム、グアム、沖縄（瀬底島と黒島）から報告されている（亀崎・亀崎、1985; Nakasone, 1975）。サンゴヤドカリ類は普通の岩盤や石灰岩上でもみられるが、アカツメサンゴヤドカリはミドリイシやハナヤサイサンゴの上にいることが古くから知られている。しかし、サンゴとのかかわりはまだわかっていない。ところで採取してきたアカツメサンゴヤドカリを生きている内に貝殻から取り出そうとして、私は大変苦労した。比較的薄い殻の宿貝に入っているヤドカリでは、殻軸の頂点を火であぶってヤドカリを追い出す方法が有効だが、シロレイシガイダマシやオオウラウズガイのように殻のぶ厚い宿貝を熱するとヤドカリは中の水が湯立つまでがんばって、遂には殻の中で死んでしまう。朝倉さんに AMSL での経験を話して、ヤドカリの出し方を尋ねたら、よい方法はないが、宿貝をゴム粘土などで固定して放っておけば中にあるヤドカリは不快になって自ら出てくることがあると教えられた。アカツメサンゴヤドカリに効くかどうか今度阿嘉島で試してみたいと思っている。

参考文献

亀崎由美子、亀崎直樹 1985. 八重山群島黒島のヤドカリ類。南紀生物 27,91-94.

粕谷俊雄 1990. 歯鯨類の生活史 p.80-127, 宮崎信之・粕谷俊雄編 海のほ乳類、サイエンティスト社、東京。

宮崎信之 1990. ジュゴンとクジラ p.157-166, 木崎甲子郎編 琉球の自然史、築地書館、東京。

Nakasone, Y. 1975. Two rare hermit crabs from Okinawa. Biol. Mag. Okinawa 13, 1-6.

追記：宮崎博士から上の文献にある書籍「海のほ乳類」と「琉球の自然史」それぞれ一冊を阿嘉島臨海研究所に寄贈頂きました。またヤドカリの宿貝は奥谷喬司博士（東京水産大学）にお願いして同定しました。お二人に感謝します。